

山椿

Yamatsubaki 93

Shiratori Yuji

白取 祐司 (33期)

子どもの頃から、お笑いや演芸が好きだった。TVやラジオから流れる落語や漫才は、貴重な娯楽だった。よく聞いたのは子どもでも分かる爆笑落語で、当時の三遊亭歌奴（故・三代目三遊亭圓歌。パワハラしてない方の圓歌）や初代林家三平、五代目春風亭柳昇などがご最前だ。そのうち、円生、文楽など名人と呼ばれる噺家にも目が向き、次いで“若手”の談志や志ん朝にも、夢中になった。そこからは、お定まりのコースだが、高校、大学と落研に入って腕を磨く(?)ことになる。

落語の魅力を聞かれることがある。いろいろあるが、私見によれば、落語に垣間見えるある種の反権力性（権威におもねらない!）も落語の隠し味になっていて、そこが魅力だと思っている。戦時中、警察によって多くの落語が禁演落語として“自粛”させられたことが想起される。禁演落語ではないが、夏の代表的演目『たがや』で、たが職人が侍から奪った刀で侍の首を刎ねるオチも、落語らしいオチといえるのではないかな。また、庶民の自堕落は、そのまま肯定され、道徳的権威（ご隠居さんなど）は最後に打ち負かされるのである。

落語（寄席）と権力について、忘れがたい記憶がある。昭和から

平成に元号が替わる時期、日本中がその「象徴」の危篤、臨終を悲しんで“自粛”一色に染まった。「お笑い」番組は自粛させられ、テレビの「歌謡音楽祭」も、「祭」が良くないということではなくなった。パチンコ屋は、店外に漏れる音楽と照明を自粛したが、店内では静かに(?)営業していた。そして、「象徴」が崩御された1989年1月7日、私はたまたま出張で東京にいた。重苦しい空気から解放されたくて向かったのが、都内某演芸場。入口は静かで、本当に落語や演芸を観られるのかと心配しながら扉を開けた。中は結構な客入りで、出てくる落語家もいつも以上に活気があり盛り上がっていた。芸人たちは、一方的なお上からの“自粛”要請で仕事を奪われ、相当ストレスがたまっていたようだ。私は、次々と繰り出される「自粛ネタ」「崩御ネタ」に、ほかの観客と一緒に、腹を抱えて笑い転げた。幸い、これらのネタに怒り出す危ない客はいなかった。

時代は変わった。多くのお笑い芸人を擁する（関西の）興行会社がついつのまにか巨大化した。経産省所管の機構から巨額の出資を受け、また大阪・関西万博に深くかわるなど、今や政治、経済分野まで“芸域”を拡げている。この「お笑い」巨大企業は、東京のテレビ



筆者近影

局各社を株主に迎え、各局に番組や芸人を提供して、（関西風の）笑いを全国展開してみせる。所属芸人約6000人の繰り出す「お笑い」は、会社に利益をもたらす重要なコンテンツとして、日々消費されていく。この管理された「お笑い」は、コンプライアンスの名のもとに牙を抜かれ、権力にもスポンサーにも歯向かうことはない。弱いもののいじめの笑いはあっても、権力批判の笑いは登場しないのだ。

昔、飯沢匡の『武器としての笑い』（岩波新書）を読んで、「笑い」は庶民にとって最強の政治的武器だ、と教わった。だが、巨大企業でつくられる「笑い」は、庶民を懐柔する装置ではあっても、権威と対峙する「武器」となることはない（知らんけど）。

笑えない話である。

